

2-4. 考察

社会がめまぐるしく変化し、人々の価値観が多様化しているといわれている。大学生も同様に多様化し、時代によって大学生を取り巻く環境は大きく変わり、この変化に伴って、大学生の社会からの評価にも大きな変化があるように思われる。

経済産業省の「社会人基礎力」に謳われているように、基礎学力、専門知識はもちろん、主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力などとともに、豊かな人間性や基本的な生活習慣が今の大学生に求められている。

今回の研究指定を機会に、「キャリアカルテ」を活用し、就職率の維持・向上と満足度の高い就職のための基礎情報収集として、3年間に亘り、満足度や就業状況などを把握するために追跡調査を実施した。

この調査結果から、予測されたことではあるが、採用先が学生に求める能力には、数値化しやすい基礎学力や専門知識だけでなく、測定しにくいコミュニケーション能力や実行力、積極性といったことが重視される傾向にあることが確認できた。

これらの測定し難い能力は、家庭や地域社会の中で養われるものと思われてきたが、家庭の教育力の低下や地域コミュニティが崩れてしまった今の環境では、自然に身に付けることが難しくなっている。このような状況下で、学校教育に対して、基礎学力や専門能力だけでなく、これら社会人として必要となる基礎的能力の育成が期待されている。

また、今回の調査で明確となった点は、意識・認識の面において本学卒業生が考える「能力」レベルと採用先が判断する「能力」レベルに大きな差異があることである。調査項目によって卒業生が過小評価したり、過大評価したりすることはあるものの、意識・認識面での自分自身への甘さと採用先の現実的なシビアな評価との差異が際立っているように感じられる。

現在、採用先の職場では、新しい価値創出に向けた課題を発見し、仲間あるいは関係者などからアイデアを収集して、チームワークを大切にしながら新価値創出を実現する実践力が求められている。

そのために、学生は学生時代に自らの能力や適性を見極め、磨き、成長する機会を持つことが必要である。つまり、学生には学内での学びの過程は勿論のこと、学外においても、現状を分析し、課題を発見し、一歩前に踏み出し、失敗を恐れず、粘り強く課題を解決する実体験の場が求められている。社会人基礎力である主体性、目標設定、創造力、情報伝達、実践力などを採用先、地域社会と連携した取り組みによって、学生は多くの人々と関わり、価値観の相違などを学んでいく機会が必要である。

学内では、学生が多くの教職員と関わりを持つことが出来、教職員は協働してきめ細やかな指導・支援を行うことを可能とするために「高短キャンパスネット」を導入した。

今後の課題は、学生の学びの過程では、教養・専門教育やキャリア教育において、社会で活躍するために必要な能力を育成できる仕組みを具現化していくことである。

なぜなら、本学では、幼稚園、保育園、施設等の実習や社会体験実習などで学ぶ機会が多いが、学外実習や短大の学びでは、専門的な技術や技能の習得が優先され、社会人として必要とされる能力が十分に育成されていないことが今回の調査でより明確になったからである。課題解決に向けて、教職員一人ひとりが今まで以上に当事者意識を高め、協働した取り組みを実践することが大切であると痛感している。

終わりに、3年間に亘る調査にご協力いただいた採用先の園、施設、企業の皆様に感謝するとともに、今後とも卒業生の成長に絶大なるご指導を賜りますことをお願いする次第である。